インタビュー

トロント国際作家フェスティバルに参加

著書「きらきらひかる」が英訳出版された

作家 江國香織さん

〈取材・平山紀久子〉

ガラス細工のような細い体、透き通るような細い髪、少女のような高い声。しっかりとした存在感があるようで、ふと目をそらすと消えてしまいそうな頼りなさ。それが作家、江國香織自身の姿であり、また、彼女の作品から漂う雰囲気でもある。

真面目で優しい彼女を象徴するこんなエピソードがある。

「アルバイトで、子どもに英会話を教えていたことがありました。私の担当のクラスに、小学一年生の男の子がいてね、英語は分からないけど、きちんとものを考える子だったんです。

ある日のレッスンで、色の名前を使ったことがありました。教科書に載っている五つくらいの色の名前を使って、何色が好きなのか、それぞれ英語で言うんですけど、その一年生の子はすっごく考えるんです。ずっと考えて、水色が好きだなって決めても、それが教科書に載っていないから、何と言っていいのか分からないの。だからずっと考えているの。

私ね、そういうのをずっと待ってしまうんですよ。本当に彼が好きなのが何色なのかなんて、その場ではあまり問題じゃないんだけど、どうしても水色が好きだって言いたい気持ち、分かるじゃないですか。それで、他の子のレッスンの進行が遅くなってしまうでしょ。プログラムがきちんした学校だったから、そういうところが合わなくて…。

でもね、最初の一カ月、お給料をもらいながらトレーニングしてもらったし、がんばろうと思ったんですよ。給料泥棒みたいになりたくなかったから…。でも、やっぱり半年で辞めちゃいました」

どんなお菓子よりもおいしい言葉

子どものころから、読んだり書いたりすることが大好きだったという江國さんだが、作家になろうと真剣に考えたのは、24歳ぐらいのこと。それまでは、英会話の先生をはじめ、さまざまなアルバイトを経験している。果物屋さんになりたかった時期もあったそうだ。

「それでね、果物屋さんでアルバイトしてみたんです。でも私、うまく仕事ができないんですよ。売り子さんもダメだし、機械なんか全部ダメ。ファックスも送れないし、パソコンも打てないし。今でも原稿は手書きですよ。

あまりにも他にできることがなくて、これはもう、書くことしかないなって思ったんですね」

何もできないけれども、書くことならできると思わせるもの。それは何だったのだろうか。

「私の生き方すべてが言葉をベースにしていて、言葉だけが私の武器だったんですね。数学でも科学でも、言葉に置き換えないと、記号だけでは理解できない。

そうそう、よくお菓子の箱なんかに『香ばしいクッキー』とか、『とろけるようなクリーム』とか書いてあるじゃないですか。あれを読むのが大好きでした。高校生くらいのときだったかな、ふと気付いたんです。どんなにおいしいお菓子も、そこに書いてある言葉ほどはおいしくはないなって。

何かおいしいものを食べたら、手紙とか日記とかに書くんですけど、ああ、この言葉の方が実際の味よりも絶対おいしいわって思うの」

江國さんの「言葉好き」は日本語だけにとどまらない。

「短大で国文科に進学したことが、自分には自然なことだと思っていました。でも、自分でも驚いたんですけど、英語の授業がほとんどないことがとても寂しかったんですよ。英語が好きだなんて自覚がなかったから、びっくりしました。だからときどき、英文科の教室の前で立ち聞きしていたんですよ。すごく怪しかったと思う」

その後、英語の専門学校を経て、アメリカへの語学留学を経験した江國さん。英語という言語にただならぬ影響を受けたようだ。

「子どものころから古典的な本が好きだったということと、父（随筆家の故・江國滋氏）が、言葉にとても厳しかったこともあって、私の日本語は少し古臭かったんですね。そこに、英語の影響が入って、何だか奇妙な書き言葉になってしまったんです。

たとえば、私の文章には人の名前とか、『私が彼に言った』とかの人称代名詞が多いんです。日本語では省略しても構わないし、逆にいちいち書いてあると煩わしいものなんですけど、それが誰の行動なのか、つい、はっきりさせてしまうんです。

それから、英語には冠詞というものがあって、一度出てきたものは、後から再登場するとちゃんと印がついているでしょ。私は日本語の文章を書いても、そのコップとかその本とか、冠詞をつけてしまうんですよね。

文章だけじゃなくて、私自身にとっても大きな発見がありました。それは、言語と人格というのは深くつながっているということ。

英語と日本語には、お互いに訳しきれない表現があるでしょう？それはつまり、日本語にしかない概念、英語にしかない概念だと思うんです。私自身、日本語を話しているときと、英語を話しているときでは違うと思うんですよ」

江國香織（えくに・かおり）

1964年　東京生まれ

目白学園女子短期大学国文科卒

1988年「409ラドクリフ」（フェミナ賞受賞）、1992年「きらきらひかる」（紫式部文学賞受賞）など、多数の小説を発表。日本の若い女性にもっとも読まれている作家の一人。児童文学の分野でも数多くの創作、訳がある。

何を書くかよりもどう書くか

江國さんの小説は、よく「恋愛小説」と言われるが、いわゆる「恋愛小説」とはちょっと趣が違う。今回英訳された『きらきらひかる』も、一風変わった夫婦関係が描かれている。情緒不安定でアル中気味の妻、笑子と、その夫でゲイの睦月。作品が発表されたとき、社会通念から切り離されたその主人公たちの関係のカタチそのものが注目を浴びたことに、江國さん自身が一番驚いたという。

「もともと、恋愛小説っていう言葉自体がちょっとヘンだと思うんですよね。何を書くかというよりも、どう書くかというのが大事だと思っているから、どんな関係が書いてあるかっていうのは、そんなに重要じゃないと思うんですよね。笑子と睦月の関係も、別にその形自体はあまり重要ではなかったんですけどね」

『きらきらひかる』は、章ごとに語り手を変えて、笑子と睦月が交互に独白をする形で進行する。

「2人が交互に語るのは、同じできごとが、見る人によって、特に男女間ではまったく違う物語になってしまうのが面白いなと思ったからです。だから、どちらか一方の視点だけで書いたり、第三者の目で書くよりも一人称で書きたいんですね」

言葉を愛する江國さんだが、言葉の説明よりも目で見たことを信じたいという切実な実感も、文章に表れている。

「五感を使ってもらうことが多いんです。恋人の描写にしても、『やさしい』なんていう、証明のできないような言葉は絶対に出てこない。触ると硬いとか柔らかいとか、お尻の触った感じが好きとか、そんな表現が多いですね」

読者に五感を使わせる表現。それには当然味覚も入っている。実は、食べたり飲んだりするシーンが多いことでも江國さんの作品は知られている。

「お酒を飲むのが大好きなんです。よく飲むのはビールとかワイン。日本酒や甘いカクテルは飲みませんね。

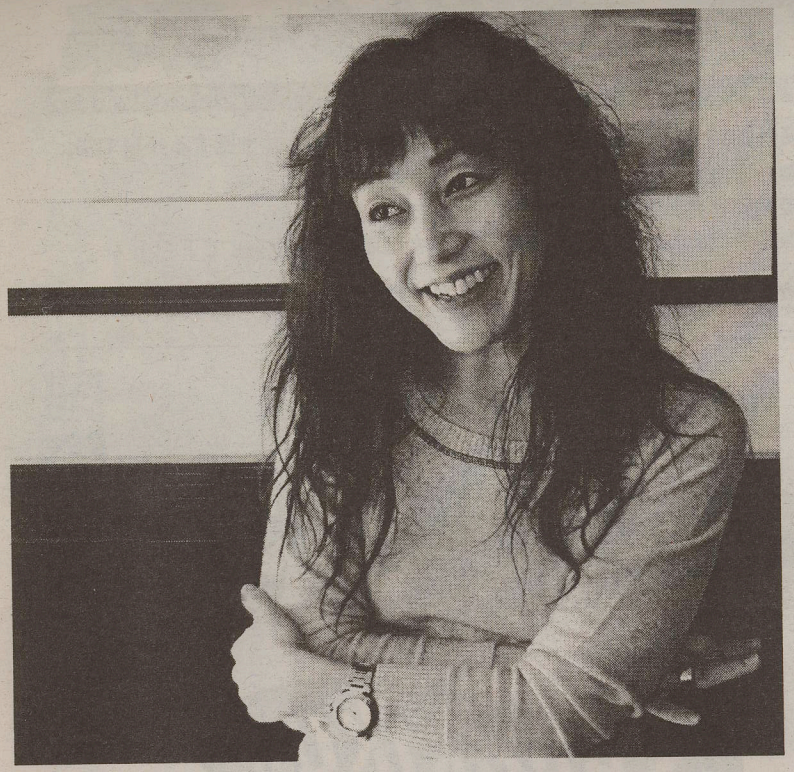
料理は大好きですよ。得意かなぁ…。でも、そうね、書くことの次ぐらいに上手かも。

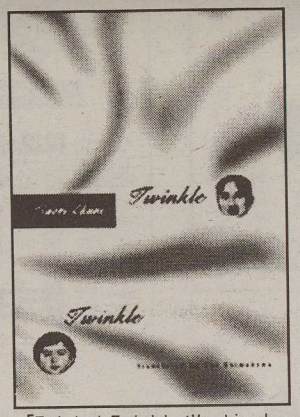
ストレス解消ってわけではないんです。ストレスはあまりたまらないし…。

あ、でも一つ、これをしないとストレスがたまるっていうのがあるんです。それは、毎日お風呂に2時間入るっていうこと。毎朝、お風呂にゆっくり入りながら本を読むんです。旅先でも必ずですよ。

以前は、作家のイメージどおり朝は寝坊して夜型だったんですけど、今は犬と夫がいるんで…。あ、犬が先ですよ。だって、夫は私がいなくても一応は生きていけるし…。

朝、2時間お風呂に入って、犬の散歩に行って、コーヒーを飲んで、大量の果物を食べるんです。それで大体午前中は終わってしまうんですよ。でも、それをしないと、ストレスになっちゃうから」





「Twinkel Twinkle」Vertical Inc. 刊。江國さんは「自分の作品が中国語や韓国語に翻訳されたことはありましたけど、自分でも読める言葉に訳されたのは、とてもうれしい」と語った

言葉を使うのは楽しいこと

小説家としての顔と同時に、江國さんは児童文学の翻訳家としても活躍している。また、江國さん自身の創作にも児童文学は多い。

「自分の作品で、児童文学と呼ばれるものもありますが、自分ではそうは認めていないんです。私の中で、児童文学というものは、とても高いレベルのものだから。

くまのプーさんとか、ブルーナのうさこちゃんとか、ピーターラビットとか、あんな、小さい人たちにも読んでもらえるようなものを、いつか書けるといいな」

最近、パソコン、インターネットの普及によって、気軽に文章を発表する場が増えた。それにともなって、世界的に作家志望者が増えているそうだ。

「私にとって、書くことが人生のすべてというわけではないし、でも、ただの仕事でもない。ただ、私の生活のすべてのことが書くことがつながっています。日々の雑用も、おいしいものを食べたり飲んだりすることも、人と会うことも、全部。どんな人にとっても、書くことは、その人の過去も全部つながった、自分の確認みたいなものじゃないかな。

何かを書く人が増えているというのは、いいことだと思います。そこから小説家になるというのは別の話でしょうけれど。

最近人々は、読んだり書いたりということから離れていたじゃないですか。使える言葉の数が減ると、感受性や概念の数も減ってしまう。言葉を使えるというのは楽しくて、人を豊かにすると思いますよ」

読者プレゼント

「きらきらひかる」の英訳版、「Twinkle Twinkle」(Vertical Inc.)の江國香織さん直筆サイン本を読者の中から抽選で2名様にプレゼントします。希望者は7ページの応募用紙に記入の上、11月21日(金)までに日加タイムスまでご応募ください。